

8. まとめ

地質部会では、平成7年度および8年度に、四国の活断層に関する既往の調査・研究資料に関する文献調査を実施し、四国およびその周辺地域に分布する活断層に関する現知見の取りまとめを行った。平成9年度は自治体による活断層調査結果も反映して、四国の活断層に関する最新の研究成果を取りまとめた。その結果、中央構造線活断層系をはじめ、四国の地震防災上今後評価必要とされる中央構造線活断層系活断層の候補を選定し、これらの活断層から発生すると想定される地震および四国における地震動予測の基礎資料を作成した。また、四国の県庁所在地のある平野の地下構造についても、既存の調査資料の取りまとめを行い、今後の研究方向を示した。平成9年度の研究概要は以下の通りである。

(1) 四国の活断層に関する調査

①長尾断層（香川県）

約2万年間隔でM7.1前後の地震を発生することが明らかになった。地震規模はM7.1で変更点はない。

②中央構造線活断層系伊予断層（愛媛県）

活動度はB級、地震規模は $L \geq 14.5\text{km}$ から $M_L \geq 6.8$ と評価しており、変更点はない。

③行当岬断層（高知県）

完新世（最新1万年間）の活動はないようであるが、活断層であることが完全に否定されていないため、活断層図にはそのまま残る。

④吉良川断層および仏像構造線（高知県）

本部会では特に抽出していない断層であるが、調査の結果活断層である証拠は得られていない。

(2) 県都のある平野の地下構造

①徳島平野

鳴門市の讃岐山脈南麓の中央構造線活断層系の南側では鮮新世～第四紀の堆積物（土柱層）が約1km前後と非常に厚く堆積し、神戸と同様な地下構造を形成している。

②高松平野

高松平野南縁の長尾断層による三豊層群（鮮新世～第四紀）基底の高度差は60～70m程度のため、神戸ほど顕著な非対称構造は形成されていない。

③松山平野

松山平野の南西縁を限る中央構造線活断層系伊予断層に沿っても、基盤岩深度に100m以上の高度差がある。また、重信川に沿う松山平野東部基盤岩の深度が160m以上と深くなっている。

④高知平野

高知平野では、盆地状に堆積物が厚く堆積し、浦戸湾頭に向かって基盤岩深度が深くなる傾向がある。

今後の調査研究課題としては、

- ①地域のレベル1地震動およびレベル2地震動の設定
- ②四国の活断層の確認調査
- ③大縮尺の活断層図の作成・公表
- ④活断層から発生するであろう地震の規模の推定（セグメンテーションとグルーピングの問題）
- ⑤トレンチ調査等による地震危険度の高い活断層の解明
- ⑥活断層近傍の地下構造、地盤特性の把握
- ⑦都市周辺の地盤図の整備
- ⑧ハザードマップの整備
- ⑨産官学による活断層の調査研究体制の推進

等をあげることができる。